

主体的な学びを育む授業づくり

ー 子ども同士のかかわりを通して ー

学習開発コース (11220908) 菅 原 路 子

本研究は、子どもたちの「主体的な学び」を育む授業づくりを目指すものである。「主体的な学び」の姿を自己の考えを形成しながら学習に取り組む姿と捉え、学習場面における他者とのかかわり、特に子ども同士のかかわりについて先行研究の検討と実践を行った。

その結果、学習場面における子ども同士のかかわりは、学習への意欲的な取り組みを促し、多様な考えとの出会いが自己の考えを吟味するきっかけの場となることが示唆された。

[キーワード] 主体的な学び、かかわり、学習意欲、協同学習、聞き合う

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景

筆者が教職専門実習Ⅰの際、実習校で出会った子どもたちは、自分たちの学習に意欲的かつ主体的に取り組んでいた。例えば、自分の書いた文章に対して、自分から友だちにアドバイスをもらいに行き、それを参考にしながら再び推敲することを繰り返し、よりよいものを目指して取り組んでいた。また、自分とは異なる友だちの意見を聞いて、新たに疑問を持ち、改めて資料をふり返ったり、さらにほかの友達の意見を聞きに行ったりする姿があった。子どもたちは、学習に対して受け身ではなく自分の課題意識に向かって取り組んでおり、このような姿勢が自ら学び続けるために必要なのではないかと感じた。

学校教育法では、義務教育の目標において、基礎的な知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成とともに、「主体的に学習に取り組む態度を養うこと」が示されている。「主体的に学習に取り組む態度」は、変化の激しい現代社会を生き抜いていく児童に、身に付けさせるべき資質の一つであるとされている。また、小学校学習指導要領においても、各教科の指導での自主的、自発的な学習が促されるような配慮をしていくことが示され、同時に「学習意欲の向上」が重視されている。学習意欲は、「主体的に学習に取り組む態度」の育成に欠かせないものであるといえる。

教職専門実習Ⅰでの参観授業における、子どもたちの主体的な学びの姿を生み出しているものは何かとふり返ったとき、友だちとのかかわりがひとつ重要になってくるのではないかと考えた。学

校における子どもたちの学習は、多様な人間関係の中で営まれているものである。たとえば、授業場面での教師とのやりとりや、友だちとの話し合い、協力して課題をこなすといった他者とかかわることが、学習場面の中には数多く存在する。つまり、子どもたちの主体的な学びを考えるにあたって、子どもの他者とのかかわりは重要な要素であるといえる。これらのことから、教師として子ども同士のかかわりを大切にするこゝで、意欲的且つ主体的に子どもたちが学ぶことができるような授業を目指すこととした。

筆者は、子どもの「主体的な学び」の姿は、子どもが、自己の考えを形成しながら学習に取り組む姿であると考えている。自己の考えを形成していく過程における他者とのかかわり、本研究においては、特に子どもにとって授業を中心とした学習を共有する存在である友人、子ども同士のかかわりに注目していく。

(2) 研究の目的と方法

子どもの主体的な学びを育むためには、子ども同士のかかわりを意識的に取り入れた授業を行うことが必要であると考えている。本研究では、授業場面における主体的な学びにつながる子ども同士のかかわりについて先行研究を検討する。それをふまえて、実践とその考察から、子ども同士のかかわりが主体的な学びを促すことを明らかにしていく。

2 先行研究の検討

(1) 友人関係と学習動機づけの関連

学習意欲、すなわち学習における動機づけの問

題は、近年、子どもの人間関係の側面からの研究がおこなわれてきている。中谷(2002)は、児童の社会的責任目標が友人関係を媒介として、学業達成に及ぼす影響を検討している。小学5,6年生の児童115名を対象に社会的責任目標、社会的責任行動、友人からの受容、教科学習への動機づけ、学業成績を測定している。その中で教科学習への意欲についての検討から、友人から受け入れられることによって、教科学習に対して意欲的に取り組むようになることを示した。

岡田(2008)は、友人との学習活動に注目し、自律的な動機づけと充実感との関連も踏まえ検討している。その結果として、学習と友人関係に対する自律的な動機づけが、友人との学習活動の生起に影響する可能性が示唆されている。また、友人との相互作用の中で、学習に対する充実感を高め、学習に対して肯定的な態度や感情をもち得ることが示されている。

これらの研究から、他者からの受容が学習意欲を高め、自らに影響を与える他者との関係性の強さが、動機づけの程度にも影響を及ぼす、といった学習場面における他者の存在の重要性が分かる。学校・学級における子どもたちの学習に取り組む態度を考える際には、友人の存在を考慮する必要がある。

(2) 学習場面における子ども同士のかかわり

杉江(2011)は、「子どもが、主体的で自律的な学びの構え、確かで幅広い知的習得、仲間と共に課題解決に向かうことのできる対人技能、さらには、他者を尊重する民主的な態度、といった『学力』を効果的に身に付けて行くための『基本的な考え方』として、協同学習を提唱している。そして、協同学習を、『学び合い、高め合い、認め合い、励まし合う』学習活動である」としている。協同学習の効果として、まず、相互交流によって、多様な意見に出会い、多様な情報を得ることができ、よりよい解決に至る可能性が増すということを挙げている。加えて、メンバー同士が成長意欲を理解し、互いに意欲づける働きをあげている。

(3) 子ども同士のかかわりを取り入れた授業実践

松本ら(2010)・杉江ら(2010)などの実践では、児童の主体的な学びを促すための授業設計時の配慮として、次の3点を挙げている。

- ①単元や1時間の学習内容と学習過程についての見通しをもたせる工夫

- ②話し合いに入る前に十分な個人思考のステップの導入

- ③話し合いの内容を踏まえて、再度個で思考を練り上げるステップの導入

この実践における成果として、まず単元の見通しや1時間の流れをしっかりと理解することによって、子どもたちの意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになったこと。次に、明確な課題意識を持たせた上で、相手や形を変えて交流する場を設定することで、交流が個人の考えを練り上げる機会となり、読解の力が高まったと感じられたことが挙げられている。主体的な学びを促すには、学習の見通しを示すこと、課題意識を明確に持てるような上での交流の場を設定することが必要な条件であることが示唆される。

また、齋藤ら(2007)は、子どもたちが主体的に学習に取り組めるように、ペアで聞き合う活動を取り入れた国語の授業を行った。ペア交流を取り入れることによって、自分の考えを持てない児童たちは発表時の自信につながったり、交流前より交流後の方が良く書けたなどの達成感を持てるようになったり、といった友だちの考えから学ぶ良さを実感できるようになったという成果が得られた。このことから、子どもが友だちから学ぶ、友だちと学ぶことに良さを感じて学習に取り組むためには、聞き合うことを大切にしていけることが重要であると言える。

3 実践と結果

本研究の実践は、教職専門実習Ⅱで配属されたA市内のX小学校で行った。

(1) 実践授業について

この授業は、2011年11月15日に1年生(計23名)を対象として行われた算数の授業である。「ひきざん」の学習、全12時間の6時間目であり、前時までの減加法に加え、減々法の計算の仕方について知り、自分にとってやりやすい計算の仕方では、どちらの計算の仕方(減加法と減々法)が自分にとってやりやすいのか隣の席の友だちと聞き合うという交流の場を設けた。子どもたち自身が、自分にとってやりやすい計算の仕方が減加法、減々法なのか認識し、やりやすい計算の仕方とその理由は一人ひとり異なることを知ることを目指した。隣の人と聞き合うペア交流を行うことで、話す

ことへの緊張感が薄れ自分のことをきちんと話すことができ、友だちの話も集中して聞くことができる考えた。

(2) ペア交流時の児童の様子

ペア交流の全体の様子は、どちらの計算の仕方が自分はやりやすいと思うかについては、ほとんどの子どもが友だちに話すことができていた。一人で話すことが難しかった子も教師や友だちとのやりとりの中で話すことができるようになった。

以下に、ペア交流時の子どもたちの対話の記録である。新たな疑問が生まれたり、友だちの考えに興味をもったり、自分の考えを明確にすることができたと思われる場面を挙げていく。

【場面1】：隣の席のB児が自分とは違う計算の仕方を選んでいることに驚いたC児

C：Cは、Bくんとやり方が違う。

B：うん。ちがうね。

C：Cはね、こっち(減々法)。

なんでかって言うとなね。答えが分かりやすいの。

B：ふ〜ん。

C：Bくんはこっち(減加法)なの？

B：だって、こっち(減加法)の方が、ぼくは難しくない。わかりやすい。10と何かに分ければいいから。

C・B：・・・。

教師：Bくんの理由はわかった？

C：うん。そこ(10と何かに分けるところ)は分かりやすいね。でもこっち(減々法)は引くだけでいいんだよ？

B：うん。でもぼくはそこがなんか難しい。

お互いに、自分のやりやすい計算の仕方について自分なりの理由を持って話すことができていた子どもたちである。それぞれの計算の仕方と理由を話したところで、話をするのをやめてしまった。教師からの指示が、方法と理由を話すことのみだったためのようだ。教師が一言投げかけてみると、C児とB児が、お互いの理由についても共感できるところを伝えながら、改めて自分はどちらの計算の仕方がよいのか伝えている。

C児は、次時での適用問題を自分のやりやすい計算の仕方でき進める際に、前時に自分がやりやすいと言っていた計算の仕方ではない方で解いていた。その理由を問うと「昨日Bくんが言っていたから、こっちのやり方でも解いてみようかなっ

て。やっぱりここ(10と何かに分けるところ)は簡単なの。」と答えた。その後、C児はどちらの計算の仕方でも計算することができるようになった。

【場面2】：自分がやりやすいやり計算の仕方がよくわからなかったD児と隣の席のE児

E：Eちゃんどっち？

D：う〜ん……………わかんない。

E：どっちか指さしてみてよ。(黒板を指して)

D：わかんない〜。

E：もう〜、どれみせて。(ノートを見る)

Dちゃんは、この問題をこっちのやり方でして
るよ？

D：ああ〜んじゃこっちだ!!

E：わかって、よかったね。これ、ぼくといっしょ
じゃん。

D：おなじだね。

E：ぼく、こっちの方が間違わないで計算できる。

D：うん。

D児は、教師の一斉指導や指示が通りにくいことがある。また、学習全般に対して苦手意識を持っており、意欲的に学習に取り組む姿がなかなか見られない子どもである。この場面では、立式は出来ていたが、自分の計算の仕方がどちらなのか判断出来ず不安そうな様子だった。しかし、E児から自分がどちらなのか教えてもらったことで、表情が明るくなった。次時では、E君と話して明確になった自分の計算の仕方ですればよいことを伝え、意欲的に学習に取り組んでいた。

(3) 授業後のインタビュー

授業後、ペアで聞き合った感想を、無作為に選んだ7名の子どもにインタビューを行った。

- ・友だちにお話しできて楽しかった。
- ・友だちが聞いてくれたからうれしかった。
- ・友だちと違ってびっくりした。
- ・どっちがやりやすいかは分かるんだけど、どうしてなのかはわかんなかった。
- ・隣の人じゃない人のも聞きたかった。
- ・僕は絶対こっちだと思ったけど、そうじゃない人もいてなんでもかなくて思った。
- ・みんなバラバラでびっくりした。

以上の回答を整理すると、友だちと自分の考えを聞き合ったことへの好感と、友だちとの違いに対する気づきや驚きに関するものに大別できる。

4 考察

(1) 子ども同士のかかわり

【場面1】の2児は、それぞれが自分のやり方に自信を持ち、みんなも一緒であると思っていた。しかし、互いの考えを聞き合ったことによって、他方の計算の仕方のよさを知り、考えるきっかけとなったといえる。また、次時での他方の計算の仕方でも解いてみるという行為は、本時での友だちとのかかわりの影響だと考える。このことから、課題意識をもった上での子ども同士のかかわりだけでなく、子どもたちが課題意識を見出し、意欲的且つ主体的に学習するためのかかわりも考えていくことができると考える。

【場面2】では、友だちとの聞き合う時間があったことで、D児は、分からない点が明らかになり安心感を抱き、さらに自分の考えに自信を持ち、次の学習にも意欲的に臨めるようになったと考える。学習へ苦手意識を持っている子どもにとっても、教師からだけではなく、一番近い立場である友だちからの助言は、抵抗感少なく受け入れることができ、意欲づけになることが分かった。

授業後のインタビューでは、友人と自分の考えの違いへの驚きや、かかわりの中で自分の考えを聞いてもらうことの喜びが語られた。また、もっと聞いてみたいという感想からも、友だちとかかわることのよさを子どもたちが感じていると分かる。子どもの伝えたい、受容してもらいたいという気持ちだが、有意義なかかわりにつながると考えられる。

(2) 主体的な学びを育む授業に向けて

先行研究及び実践から、授業場面における子ども同士のかかわりは、多様な視点に出会い、自他の考えを聞き合い比較することで互いの考えについての理解を深める場であるといえる。しかし、このためには、まずかかわる際の土台となる自分の考えを持つことが必要となる。また、子どもたちの中には、個人ではどうしても考えが浮かばなかったり、まとまらなかったりする子もいるだろう。このような子どもにとっては、子ども同士のかかわりによってモデルに出会うことができ、考えるヒントやきっかけを得ることが出来ると考える。さらに、友だちの考えをただ聞くだけでは、主体的な学びにはつながらない。自他の考えに対して自分なりの吟味を加えるための、個人での再思考の機会が必要である。これらのことから、主

体的な学びを育む授業において以下のことに留意する必要があると考える。

- ①かかわりの前に個人思考時間を設定
- ②かかわりの目的、方法の明確化
- ③かかわりの後に再度個人思考時間の設定

5 到達点と課題

(1) 到達点

授業場面での子ども同士のかかわりが、子どもたちに新たな気づきや疑問を得たり、学習への意欲づけになったりという効果の示唆を得ることができ、授業を計画するにあたって留意すべき点について明らかにすることができた。

(2) 課題

かかわりによって子どもが得た気づきや疑問から、さらに学びを深めたり、自己の考えを形成したりするまでには至らなかった。今後は、以下の点についてさらに検討を加えていく必要がある。

- ①かかわりを取り入れる学習内容及び場面
- ②目的と方法を明確にしたかかわりの実践
- ③子ども同士がかかわる場面での教師の支援

引用・参考文献

- 松本哲廣・水谷 茂・杉江修治：「学び合いを通して思考を深める授業づくりの実践的検討—小学校6年生国語科「ヒロシマのうた」を題材として—」, 国際教養学部論叢, 第3巻, 第1号, pp. 53-62, 2010
- 中谷素之：「児童の社会的責任目標と友人関係, 学業達成の関連—友人関係を媒介とした動機づけプロセスの検討」, 性格心理学研究, 第10巻, 第2号, pp. 110-111, 2002
- 中谷素之編著：『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり—動機づけの教育心理学』, 金子書房, 2009
- 齋藤友希・瀧 敏秀・戸田道也・浅輪郁代：「伝え合い、響き合う国語の授業—ペアで聞き合う活動を取り入れた実践—」, 犬山がめざす学力の追及 犬山市授業研究会 2007 年度の成果, 協同教育実践資料7, pp. 9-41, 2008
- 杉江修治：『協同学習入門—基本の理解と51の工夫』, ナカニシヤ出版, 2011
- 杉江修治・松本泰介・稲田清美・川口尚子・山本 優子：「仲間との相互作用が生み出す学習内容理解の深まり」, 国際教養学部論叢, 第2巻, 第2号, pp. 13-24, 2010